中世の政治文化をめぐって
――中世フランス政治史研究の現状――

鈴　木　道　也

はじめに

本稿の目的は、フランスの歴史学界における中世政治文化研究の現状を確認することである。後に記すように、「政治文化」という明確な研究の対象あるいは視角がフランスの研究者たちの間で共有され、その成果が一定のまとまりを持ってこれまで学界のなかに積み上げられてきたわけではない。中世のフランス地域を対象に進められてきたいわゆる政治史研究が、研究のひとつの到達点として、近年「政治文化的なもの」の解明をめざす方向に向かっているといえる。そうした研究史研究を代表するいくつかの主要な研究成果を紹介しながら、その背後にある問題関心、具体的な研究手法の変遷をたどることで、フランス中世史研究の現状、そして政治文化研究の可能性と課題について考えることが可能になると思われる。

確認作業の起点は実証的歴史研究がフランスで開花した19世紀の末に置かれることになる。一世紀以上前の研究をここで紹介する理由はふたつある。第一に、最近の中世研究が明らかにしつつある近代国家生成史は、伝統的なジャコバン史観やそれに対する批判、あるいはジャコバン的な歴史解釈への回顧・回帰というひとつの大きな研究史のなかに位置づけて考えることが可能であると思われるからである。第二に、政治文化研究と呼びうるような研究手法や研究活動は、フランス史学において長い伝統を有するということがある。それは20世紀のフランス歴史学界において圧倒的な影響力を有していたアナール派の歴史研究と関わりを持ちながらも、それとは一定の距離を保って連綿と成果を積み重ねてきた。そのことをあらためて確認しておくことは重要であろう。

以下、最初に19世紀末から1990年頃までの研究史を確認する（1）。

1990年頃から戦後歴史学の最初の担い手が研究の一線を退きはじめ、代わって現在学界で中心的な役割を果たしている研究者たちの活動が目立ち始める。そこで1990年から2010年までの20年間の研究を、その方向性や研究手法からいくつかに分け、整理紹介する（2）。最後に、2010年以降に刊行された政治史研究の代表的な成果を紹介するとともに、それが伝統的な中世フランス像にどのような影響を及ぼしているのか/いないのかといった点を、ドミニク=バルテルミの2012年の著作に描かれた封建社会像、あるいは最近刊行されたフランス史の新しいシリーズにも言及することで確認してみたい（3）[1]。

1　中世フランス政治社会分析の歩み

（1）19世紀

ここでは19世紀における実証史学の展開と、一国史観とりわけジャコバン史観のなかで進められてきた中世史研究の位置づけを確認しておきたい。19世紀フランスでは、近代国家の建設に向けた諸制度改革と並行してアカデミズムの世界において実証主義史学が展開し、歴史研究は大いに発展することとなった。そこでは当然のごとく一国史的観点が優越し、ジャコバン主義的な歴史解釈が認識の基本的枠組みとなっていた。この時期の前近代史研究を代表するのは、自由主義者として七月革命後の七月王政を主導し首相まで務めたギゾー（François GUIZOT：1787-1874）であり、またギゾーの代理としてソルボンヌで講義し、一時は政治的にもギゾーを後継するのではないかとみられていたミシュレ（Jules MICHELET：1798-1874）である。ギゾーが進めた封建社会<Société féodale>分析は、貴族、騎士、聖職者といった諸階層間の、あるいは彼ら領主と領民の社会的連携、結合・対立関係を軸に据えていた。

この二人に加え、ギゾーの発案で始まった『フランス史関係未刊行史料叢書』刊行事業において第三身分関連歴史史料の集成を行ったオーギュスタン=ティエリ（Augustin THIERRY：1795-1856）[2]、史料中心主義を貫き歴史記述における推測や誇張の排除をめざしたフェステル=ド=クーラン

ジュ（Fustel de COULANGES：1830-1889）、ギゾーが設立したフランス道徳政治科学アカデミーの一員として、カペー朝研究と教皇庁研究で大きな成果を挙げたアシル=リュシェール（Achille LUCHAIRE：1846-1908）などの名を挙げることができるだろう。ジャコバン史観に基づく歴史叙述は、明確な政治的主張を帯びているがゆえに雄弁であり、それは時として強烈な魅力をもって過去に答えを求める読者の心に訴える。ここに示した研究者たち一人一人、あるいは彼らが率いた研究集団の歴史認識は必ずしも完全に一致してはいないが、彼らの学問的な衝突や対話が、全体として前近代フランス史像を形成することとなった。

このなかで日本における中世フランス理解にとりわけ大きな役割を果たしたのはフランソワ=ギゾーとフェステル=ド=クーランジュである。前者はその代表的著作が早くも19世紀末には翻訳されており、最近でも新装版や復刻版の刊行をみている[3]。また後者による古代世界から初期中世社会にかけての歴史描写は、教科書をはじめとする日本の概説的な世界史記述のなかに組み込まれ、現在に至ってもなお一定の影響力を有している[4]。二人に比してティエリやリュシェールの研究成果は、それが日本語で紹介されるまでに長い時間を要した[5]。ミシュレについても、彼の民衆的フランス史像の全体が全６巻の翻訳を通じて知られるようになったのは、比較的最近のことである。とはいえそこには、ドイツ実証史学の影響を受けつつも実証性と物語性の融合を目指して展開された19世紀フランス実証史学の特徴がはっきりと現れている[6]。

（2）20世紀前半～第２次世界大戦後

1929年の雑誌『アナール』刊行以降、手法としての社会史は中世研究にも導入されることになる。ただし活動の中心人物であったマルク=ブロック（Marc BLOCH：1886-1944）は、先に紹介したギゾーの封建社会論、あるいはそれに先行するマルクス主義的な歴史観の影響を色濃く受けており、近代国民国家を参照系とする研究姿勢は彼にも受け継がれていた。他方パリでは、ソルボンヌ大学を中心として、連綿と実証研究が進められて

いた。残念ながらこうした活動の成果が翻訳などを通じて我が国で広く紹介されることはなかった。この時期の中世研究を担っていた主な研究者としては、パリ第１大学のエデゥアール=ペロワ（Édouard PERROY 1901-1974）、中世修道制研究で知られるソルボンヌ大学のジャン・フランソワ=ルマリニエ（Jean-François LEMARIGNIER：1908-1980）、ストラスブール大学時代はブロックの同僚であり、その後ソルボンヌでジョルジュ=デュビーやジャック=ル・ゴフの指導にあたった農村史研究のシャルル・エドモン=ペラン（Charles-Edmond PERRIN：1887-1974）らの名を挙げることができる。彼らの薫陶を受けた研究者たちが、戦後フランスの中世史学を支えることになる。

第二次世界大戦後の学界でとくに顕著な活躍をみせるのは、エクス・アン・プロヴァンス大学そして後にはコレージュ・ド・フランスを拠点に活動を展開したジョルジュ=デュビー（Georges DUBY：1919-1996）である。彼は雑誌『アナール』が進めてきた中世社会史研究の継承者の一人であるが、地域社会のミクロな分析に基づきつつ、構造主義の影響をうかがわせる「脱構築論的」な封建社会論を展開している。紀元千年前後の社会変動を重視する彼は、カロリング期地方（pagus/comitatus）法廷の公的性格が次第に失われ、地方有力者層による自力救済圏[バン領主制]が全面的に展開する中世社会の姿を生き生きと描き出す。彼の関心は幅広く、十字軍運動の展開によるヨーロッパ騎士・貴族層の地中海地域への進出、中世社会における儀礼と人間関係、年齢集団と系族構造、中世人の個性、などの問題にも取り組んでいる。視点は多様であり、研究手法も多彩である[7]。同時期、フランス社会科学高等研究院（EHESS）に籍を置いていたのがいわゆる「アナール学派」を率いるジャック=ル=ゴフ（Jacques Le GOFF：1924-2014）である。歴史人類学を標榜する彼らは、心性史研究から表象史研究へとその研究対象を移行させつつあった。この頃パリ第４大学（ソルボンヌ大学）では中世初期から中期、9世紀から12世紀のイタリア社会を分析の対象としたピエール=トゥベール（Pierre TOUBERT:1932-）[8]や百年戦争期を中心とする中世軍事史研究のフィリップ=コンタミーヌ

（Philippe CONTAMINE：1932-）が[9]、またパリ第１大学では中世後期とくに14世紀以降の政治制度を社会構造の変化と関わらせて分析したベルナール=グネ（Bernard GUENÉE：1927-2010）が活動していた[10]。

デュビーをはじめとするこうした戦後歴史学の担い手たちがその成果を競っていた1960年代から70年代は、ミシェル=フーコー（Michel FOUCAULT：1926-1984）の一連の著作が発表された時期と重なる。構造主義的な、あるいはポスト構造主義的な認識の枠組みは歴史研究にも影響を及ぼさずにはおかなかった[11]。後で見るようにデュビーの封建社会論には再考すべき多くの点があることは間違いない。しかし1973年に発表された『ブーヴィーヌの戦い』のように、そこには心性の歴史に関心を向けていたブロックの問題意識を汲み取り、歴史認識の枠組みそのものをとらえ直そうとする斬新な研究視角が現れていることに注目する必要がある。またたとえばベルナール=グネは、ノルベルト=エリアスやフーコーの議論を踏まえ、権力の場で機能し個々の政治社会の性格を規定する要素に注目して、1980年に『西洋中世における歴史と歴史文化』を著している[12]。グネのこの研究はその後クロード=ゴヴァールやジャン・フィリップ=ジュネなど次世代の研究者たちの問題設定に大きな影響を与えることになる。

（３）パリ５月革命（1968）世代

フランスはその後パリ５月革命の時代を迎え、学問の場にも５月革命世代とよばれる人たちが数多く入ってくる。彼らに共通するのは反システム・反近代・反文明の精神であり[13]、ブルデュー（Pierre BOURDIEU：1930-2002）社会学の成果を吸収しつつ、歴史における「権力」の問題に新たな視点を持ち込むことになる[14]。ブルデュー社会学の影響はロジェ=シャルティエなどアナール派の歴史学者たちに関して指摘されることが多く、かかる影響の結果としてアナール派における心性史から表象史への力点の移動がもたらされたなどとする指摘もみられる。しかしその影響はいわゆるアナール派以外の研究者たちにももちろん及んでいた。ブルデューは現代社会の分析を通じて人々の社会的実践のなかで階級性や差別意識が再生産

されることを明らかにしたが、中世史家たちは、その議論を中世社会史、あるいは中世政治史研究に導入していったのである。

英米の学界を席巻したヘイドン＝ホワイトによるメタ=ヒストリーの議論[15]への反応が1980年代のフランス学界において必ずしもはっきりとみえてこないのは、彼ら英米の学者たちの議論に示唆を与えたブルデューやリオタールなど「ポスト・モダン」の思想家たちの主張をフランスの歴史家たちは間近で見ており、それらをすでに自らの研究に組み込んでいるという自負があったからではないかと思われる。

こうした世代を代表する者としては、パリ第４大学のドミニク=バルテルミ（Dominique BARTHÉLEMY：1953-）を挙げることができるだろう。彼は史料論の視点を導入し、必ずしも現実を反映しない、たとえば記述史料・文書史料そのものが持つ歴史的意味について洞察を加えている[16]。その成果は、後にみるように戦後第一世代の代表たるデュビーの成果に大胆な再検討を迫るものとなっている。またパリ第１大学のクロード=ゴヴァール（Claude GAUVAED：1942-）は、王の恩赦がいかなる状況下で生まれ、またその決定がいかなる形で具体的に実行されていくのか、その過程を詳細に解明することで、司法が集権化される過程のなかに人類学的な視点を持ち込むことに成功した[17]。同じくパリ第１大学のジャン・フィリップ=ジュネ（Jean Philippe GENET：1944-）は、中世人たちのなかで形成される「コミュニケーション・システム」に着目し、テクストが生み出される空間と、そのなかでテクストが果たしていた社会的機能を重視し、文書の役割を慎重に見極めていく必要性を指摘した[18]。ジュネとゴヴァール、この二人が1990年代以降の中世フランス政治史研究を主導していくことになる。そこには歴史の相対主義的な解釈や構造主義的解釈ではなく、ノルベルト＝エリアスが着目していたような、長い時を経てダイナミックに変容する人格構造と社会構造の相互依存的な発展モデルへの関心をうかがうこともできる[19]。二人と同時期に活躍した研究者として、社会科学高等研究院のジャン･クロード=シュミット（Jean-Claude SCHMITT（1946-））、エコール・ノルマルのフランソワーズ=オトラン（François AUTRAND：

1952-）[20]、パリ第10大学（ナンテール校）のコレット=ボーヌ（Colette BEAUNE：1943-）などが知られている[21]。この時代の中世政治史研究は、ポスト・モダンの歴史学を模索する様々な試みのなかから、グネによって先鞭を与えられた「政治文化」研究が、試行錯誤をともないつつ進められていった時代と整理することが可能であろう。

この時期はまたフランスの中世史家と英語圏の研究者との交流も進み、そのなかから英語圏でも優れた成果が著されている。たとえばオックスフォード大学セント・アンズ・カレッジのジャン=ダンベイビン（Jean DUNBABIN）は、中世政治思想史研究に加え、9世紀後半から10世紀にかけての中小領主支配圏の全面的展開と11世紀以降の地域単位での集権化、そして12世紀におけるカペー王権の覚醒にいたる射程の長い政治史研究に取り組み、高い成果をあげている[22]。

ここであらためて「政治文化（political culture）研究」の性格について考えてみたい。1990年代のヨーロッパにおける政治史研究を整理した近藤和彦によれば、政治文化（political culture）研究とは、「狭義の政治史のように対象を国家や権力闘争にかぎることなく、ローカルな/集団内の/集団間の、また国をこえた広域の諸力が働く磁場・アリーナを問題」にしており、その研究を通じて、「近代的な大義名分（自由・平等・進歩・国民国家…）の物語のなかに位置づけられた要素としての歴史がいったん否定され、政治も言説も、それぞれなにかの部分としてではなく、自立した存在理由あるいは意味を主張する」ものであるという[23]。ではそうした政治文化研究は日本の学界ではどのように受け止められたのか。高松百香は以下のようにまとめる。「日本においては主に政治学・法律学・社会学の分野から普及し、歴史学においても1980年半ば以降、フランス革命を中心とした翻訳書や、「政治文化」を表題に掲げた論文・著作の刊行が続いた。とはいえ、民衆の政治志向が史料的にとらえにくい日本の古代～中世史においては、「政治文化」概念本来の定義にそった研究は展開されていない現状である」[24]。

フランスの中世史研究において「政治文化<culture politique>」という言葉をはっきりと用いているのは、フランク=コラールの教科書的著作ぐらいである[25]。しかし近藤や高松の整理や理解に従うならば、「アナール学派」の歴史家であれ、またパリ第１大学など他の大学・研究機関に所属する中世史家であれ、フランスの中世史家たちの「政治史（histoire politique）」研究のなかには、政治文化研究と共通の目的意識と方法が含まれていたとみなすことは充分可能であろう。

1980年代の末に「アナール学派」の第４世代の歴史家たちは歴史研究の細分化を問題視し、また同時に記号論からの挑戦に動揺し、それらを全体として歴史学の危機と受け止めた。しかし中世研究全体を見渡してみるならば、隣接諸学問の影響下で着実に成果を積み重ねてきた中世フランス政治史研究にあっては、歴史学に対する批判に耐え、「危機」に対応するだけの準備はなされてきたのではないかと思われる。

2　1990年代以降（いわゆる「言語論的転回」以後）のフランス中世政治史研究

第二次世界大戦後を起点に1995年までのフランス歴史学界全体の動向をまとめたものとして、フランソワ=ベダリダの『フランスの歴史と歴史家<L'Histoire et le métier d'historien en France>』がある[26]。ここで「中世史」の部分を担当したのはミシェル=バラールであった。バラールは雑誌『アナール』が中世研究に与えた影響の大きさを指摘し、1970年代末以降の歴史人類学的研究の興隆や中世考古学の発展に触れている。またイタリアやスペインあるいはドイツ地域における研究成果の積極的摂取や、諸外国の研究者との交流を深化させる必要性を主張している（同書、pp. 235-240）。マドリードのカサ=デ=ヴェラスケス、ローマのローマ=フランス学院、そしてゲッティンゲンのマックス=プランク歴史研究所内に設置されたドイツ=フランス史研究代表団（Mission Historique Française en Allemagne）のその後のめざましい活動をみれば、バラールのこの主張はおおいに実現したといえるだろう[27]。

バラールの研究史整理を引き継ぐのが、クロード=ゴヴァールらが2010年に刊行した論集である。論集に収められた論文はいずれも1990年代半ば以降から2010年頃までの10数年間におけるフランス歴史学の歩みを時代別あるいは分野別に簡潔に整理したものとなっている。論集は全体として、この時期のフランス歴史学に関して ① 現代史、すなわち1870年から1958年（第３・第４共和政期）を対象とする研究の増加、② 複数の歴史的再編期（古代「末期」、紀元千年の「革命」、14世紀の「危機」）に対する再評価、③「暴力」に対する関心の高まり、を指摘している。

ここでは論集のなかでクロード=ゴヴァールとレジーヌ=ル=ジャンの共著としてまとめられた「中世史」と題された論文を参考に、関連する、あるいは論文執筆以後の情報を付け加えながら、フランス中世史研究の最近の動向を確認したい[28]。

最初にフランス高等教育中世史家協会（Société des historiens médiévistes de l'Enseignement supérieur public:SHMESP）を紹介する。現在フランスの中世史研究において中心的な役割を果たし、若手研究者の指導や海外研究者との交流にも積極的なのはこの組織である。協会に所属する研究者の数は、2010年時点で650名程度である。協会は毎年研究集会を開催しており、そのテーマは彼らの関心を端的に示している。ここ十年ほどのテーマを挙げれば以下のようになる[29]。「中世の首府」（2005年）、「中世における空間構成」（2006年）、「21世紀に中世史家であること」（2007年）、「中世における文書の権威」（2008年）、「中世における人の移動」（2009年）、「中世の外交関係」（2010年）、「中世における専門性と助言」（2011年）、「計測と中世史」（2012年）、「中世におけるNationとNations」（2013年）、「中世における手本」（2014年）、「人を治めること、魂を治めること」（2015年）、「世界史、総合関係、結び合わされる空間」（2016年）、「中世社会における生者と死者」（2017年）、「中世における抗議」（2018年：予定）[30]

このうち2007年の研究集会でジュネが行った基調報告「21世紀に中世学者であること」は、フランスにおける中世史研究の現状を知る上で重要である[31]。彼によれば、ヨーロッパ科学基金の支援を受けて1990年代後半か

ら進められた共同研究により、フランス史における伝統的な４時代区分（古代・中世・近世・近現代）の枠組みは大きく変化してきているという。すなわち研究プロジェクト「ローマ世界の変容」は4世紀から9世紀の理解にかかわり、研究プロジェクト「近代国家の生成」は14世紀から16世紀理解に影響を及ぼす。中世の始まりにみられるローマ的世界との連続性、近世の始まりにおける中世的世界との連続性は、中世史家がその視野に収めるべき時代的範囲を4世紀から16世紀まで広げることとなった。しかしジュネによれば、このことにより中世の西ヨーロッパを対象としてきた研究者たちは、ビザンツ、イスラームさらにはオスマン帝国をも比較検討の対象とすることが可能になったという。しかしジュネの報告に応えるかたちでゴヴァールは、こうした射程の拡大があらためて「中世とは何か」という問いを生み出していると指摘する[32]。この問いに答えることは容易ではない。以下では、近年研究の進展がみられる分野をいくつかとりあげ、それぞれの主要な成果を確認していきたい。

（1）（都市・王国・大学・教会）エリート［Élites］研究

研究者たちはまずエリートを「特定の社会のなかで有力とみなされ、その社会の多数に対して大きな力を行使する人びと」と定義する。そして当時の社会においては地位や富や名声といったものを明白な根拠をもって弁別することが困難であることは認めつつも、貴族、騎士、聖職者といった伝統的身分観をもって腑分けすることが難しいエリート層が中世期を通じて社会的流動性が高かったことを指摘している。エリナ=マニャーニらの研究グループは、財産移転（相続）や土地評価・取り引き（市場）に関する研究成果をもとに、生存財と威信財がともに中世初期段階から比較的多く取り引きされていたことを指摘している[33]。 教会エリートに関するプロソボグラフィー研究としては、エレーヌ=ミレとピエール=デポルトの多年に渡る研究が貴重な成果である[34]。

（2）王権イメージ研究

ここでは、王権のプロパガンダとして展開される様々な表象（彩色写本や建築物なども含む）や政治的儀礼（入市式、埋葬儀礼、プロセッション）を分析の対象とし、たとえば慈善家としての国王や王妃など、王や王妃の多面性を具体的に明らかにする。また近代的な「想像の共同体」をあえて中世の国家に措定し、王をその象徴的存在として位置づけようとする試みもみられる[35]。またそうした共同性を可視化するものとしての象徴、とくに紋章や色などに着目した研究もある[36]。さらに、聖なるものを図像を用いて表現することの可能性や意味に関する中世人たちの議論そのものに目をむけた論集も知られている[37]。すでに出版から10年程経っているが、コレット=ボーヌらの論集もこうした問題意識を共有しているといえるだろう[38]。なお、学位論文をもとに出版されたプレシール=アレジディの『貧者たちの父、国王』は[39]、集権化政策の文脈のなかで近世期以降に取り上げられることの多い「王による貧民救済（政策）」と類似する要素を中世王権のなかに見出そうとする斬新な試みである。

（3）政治思想研究

この分野の研究を牽引してきたのはアラン=ブーローである。彼は神学者や大学人など、当時の知的エリートであった人びとがその著作のなかで示していた政治社会思想と統治の現実との関係についての研究を一貫して進めてきた[40]。エルサ=マルムルスツテインの研究では、個人あるいは政治的共同体についての考え方を変化させつつあった13世紀パリの神学者たちの諸著作が分析の対象となっており、王国の政治的文化的影響力が増してくるなか、神学者たちはそれに対抗して教会を中心とした共和国を構想していたとの主張がなされる[41]。またリドウィン=スコルディアやフレデリック=ラショーのように、一般的に君主鑑とよばれる統治指南書が制作される背景にアリストテレス哲学の影響をみつつも、さらにそれを中世文学の発展と結びつけて論じようとする研究も現れてきている[42]。

（4）紛争解決研究

この分野では、紛争が発生してから解決に至るまでの過程すべてが研究の対象となっている。大小の犯罪行為とそれに対する刑罰、名誉・名声の感覚、復讐の意志の有無、世間の評判、当事者の社会的位置、そして時にそれらを規定し、また時にそれらとは離れて存在する法との関係などから、中世的社会秩序の特質を明らかにしようとする試みが進められている。この分野を主導してきたのはクロード=ゴヴァールやロベール=ジャコブらパリ第Ⅰ大学のスタッフである[43]。このような紛争解決の全体構造に関する研究の深化は、中世秩序の背骨をなすと考えられてきた封建的関係の秩序形成機能を相対化することを可能にしている。デュビーを批判するなかで立論してきたドミニク=バルテルミの一連の研究はいずれもこうした観点から進められたものであり、後に確認するように伝統的理解に修正を迫るもっとも大きな成果のひとつといっていい[44]。

（5）「近代国家の生成」研究

この研究テーマは1984年にCNRSのプロジェクトに採択され、その後ヨーロッパ科学基金の支援を受けて研究が継続された結果、政治史研究のひとつの核となっている。政治的な請願（requête）を受け、調査（enquête）し、規則を定めていく（légiférer）そのメカニズム、一連の過程に登場する人びと、そして政治的な訴えが主張される、あるいは拒絶される背景にある「公論」、そこにはハーバーマスの言うような「公共圏」が成立しているのか否かを明らかにすべく研究が進められいる。こうした研究は代表制研究とも関連しており、政治的合意形成の場への強い関心を示している。これまであまり配慮されてこなかった、中世における「下層民も含めた王国民全体の意向」という意味での「公論（Opinion Publique）」への意識が形成されたのか否かということを問う研究においても、研究者間の交流は円滑に進んでいる。この分野では、新しい史料として「都市議事録」や有力者間の「書簡」を用いて、情報の「公開」や「伝達」あるいは「非公開」などの過程を明らかにしようとしている[45]。

政治的「契約」の多様な在り方をあらためて明らかにしたフランソワ=フォロンダの研究も重要であり[46]、フランス法・ローマ法・カノン法の相互関係を研究したアルベール=リゴディエールなどの研究も有名である[47]。この他ローマ=フランス学院の主導によって組織された研究グループによる、中世司法の法的手続きに焦点をあてた論集もある[48]。

（6）一国史あるいはヨーロッパ史の枠組みを超えた比較研究の展開

ここまでの研究成果も取り込みながら、一国史あるいはヨーロッパ史の枠組みを超えた比較研究も積極的に展開されている。パリ第１大学を経て最近コレージュ=ド=フランスの教授となったパトリック=ブシュロンの活動もその一端をなす[49]。また10年以上前の成果となるが、ミシェル=バラール『東方世界のラテン人（11-15世紀）』などもそうした試みの一つといえるだろう[50]。クリストフ=ピカールが編んだ『地中海における空間とネットワーク（6-15世紀）』は、ラテン、ビザンツ、マグリブ、イスラームなど地中海世界を構成する諸文化圏の交流をテーマに、知的エリートの地中海農村部での宗教的マイノリティの法的地位、諸文化圏間の外交交渉の進め方などを分析している[51]。

これらの研究に対し、1990年代までは順調に進められてきたがここ十数年あまり進展が見られない研究領域としては、エリート研究においては必須であるはずの「王権周辺の廷臣層」に対するプロソポグラフィ研究、王と貴族との関係性、代表制研究、都市社会の内部構造研究などを挙げることができる。

ごく最近の注目すべき叢書としては、Bibliothèque d'Histoire Culturelle du Moyen Âge（BHCMA）を挙げることができるだろう。そこに共通するのは、中世文化を残された作品の生産、機能、普及、受容の観点から研究しようとする姿勢であり、テクスト分析に重点を置いている。分析に際しては、言葉そのものだけではなく付随する儀礼や書き手（語り手）と聞き手の関係性にも配慮している。ひとつの文化の背景にあるディスクール=ノ

ルマティフ（規範的言説）の解析を目ざし、文学、神学、哲学、法学などを専門とする研究者たちとの積極的な交流を続けている[52]。

ここで紹介した研究に共通するのは、個別事例に関する「厚い記述」をいままで以上に重視するという傾向である。「厚い記述」という表現を用いたのはフランスの人類学者モーリス=ゴドリエ（Maurice GODELIER：1934年）である[53]。レヴィ・ストロースを継ぐ次世代の文化人類学たちは、人類学者が持つ権力性がその叙述をゆがませているのではないかとする批判を受けていた。これに対してゴドリエは、人類学者の調査は個人的なものであり、そこには主観的要素が入りこんでいること、また人類学という学問の固有性は、まさにそうした主観性の投入にある事を認める。しかし他方で、人類学者は主観や五感を動員して得られたデータと認識を多数の人間の語りや行為に反照させることで、その妥当性を検証することができる、と主張する。すなわち彼によれば、現実がどのようにして生み出され、どのように人びとの生活に影響を与えているかを、あくまで事例に沿いながら緻密に分析し報告することが重要であるという。こうした緻密な分析と報告が、彼の言う「厚い記述」を構成することになる。

加えて一連の研究は、同じくモーリス=ゴドリエが言うところの「観念（idéel）」への関心も深めつつあるように思われる。ここでいう観念とは、個々人の心のなかで想起され生み出される象徴的なものであり、現実には実在しない。時代の制約を受けず、また集合的でもないことから、これまで問題にされてきた心性とは異なっている。その結果研究者たちは、伝統的な人類学の方法論だけではなく、心理学的な分析をも試みている。その目指すところは、伝統的な政治史や政治思想史、あるいはまた文化史とも異なり、政治社会のなかで象徴を用いて展開されるコミュニケーション回路がどう機能し、政治社会そのものの性格にどのような影響を与えていくのか、人々の観念と象徴体系との関係を明らかにすることである。

3　中世政治文化研究の現在

（1）「中世からルネサンスにかけての象徴的権力（Le pouvoir

symbolique entre Moyen Âge et Renaissance）-13世紀から17世紀-」

最後に、2010年以降の研究状況を整理しておきたい。パリ第１大学でジャン・フィリップ=ジュネが展開してきた研究プロジェクト「中世からルネサンスにかけての象徴的権力<Le pouvoir symbolique entre Moyen Âge et Renaissance>」は、2009年からは欧州研究会議<European Research Council>が支援する研究プロジェクト、「象徴と国家（Signs and States）」へと格上げされた。研究者たちは当該プロジェクトの起点となった研究集会「ローマとヨーロッパ近代国家」<ローマ=フランス学院・2002年> をひとつのモデルとして、その後もヨーロッパ各地で年一回以上の研究集会を開催しており、集会での報告をまとめた論集も続々と刊行されている。集会のテーマは以下の通りである（<　>内は開催地・開催年）。「都市を示す」<ローマ=フランス学院・2009年>、「暗黙の正統性」<ローマ=フランス学院・2010年および2011年>、「真実」<ローマ=フランス学院・2012年>、「イメージ・崇敬・典礼」<ミラノ・2009>、「政治社会における言語：西ヨーロッパ14-17世紀」<ミラノ・2010>、「社会的優位性を示す」<パレルモ・2011年>、「様々な価値と価値システム」<トリノ・2012年>、「観念と物質のあいだ：空間・領域・権力の正当化」<ピサ・2013年>、「ダンテからルーベンスへ：政治と関わる芸術家」<ヴェルサイユ・2012年>、「合意と表象」<ディジョン・2013年>、「chartesからconstitutionsへ」<マドリッド・2014年>[54]。

研究プロジェクトの対象となる「13世紀から17世紀」という時間軸の設定にはどのような意味があるのだろうか。地中海世界の西方におけるローマ帝国の解体後、西方世界ではカトリック教会が象徴的権力を独占していた。「グレゴリウス改革」は、教会による象徴体系の独占状態をさらに強固なものにする方向で作用した。しかし13世紀末ごろから、世俗の側は教会に依存せず自らの権力を独自に正当化する途を選択し始める。教会の象徴体系への挑戦である。攻勢を強める世俗の側に対して守勢にまわった教会が自らの存在を再確認する機会がトレント公会議（1545-1563）であった。文化の広がりに境界はなく、地域社会は多様であることから比較研究は重要でありまた可能である。トレント公会議以降、フランスでいえばル

イ13世治世期からリシュリュー期にかけて、帝国でいえば三十年戦争期、さらにイベリア半島でいえばオリバーレスあたりまでを視野に入れて、共同研究は展開されることになる。

研究プロジェクトの大きな目的は、記号学の知見も借りながら、西方ラテン・キリスト教世界における封建社会から政治社会への変容を、上で挙げた集会テーマに示されているように無数の象徴に注目し、分析していくことである。研究の見取り図は次のように整理できる。西方におけるローマ帝国の解体は、当初はカトリック教会に対してほぼ独占的な象徴的権力を与えることとなった。中世初期の教会は、そのことにより「蛮族」の王たちにキリスト教的倫理観を強制することが可能になったのである。11世紀半ばからのいわゆる「グレゴリウス改革」は、こうした教会による象徴体系の独占状態をさらに強固なものにした。ミサ、聖変化の観念、そして煉獄の存在は、人々の信仰、救済への祈りといったものを従来よりも個人的なものとし、個々人を教会に結びつけることとなった。

他方、経済活動の活発化に伴って多くの文書が必要とされるようになり、教会とその周辺で教育を受けることでリテラシー能力を持つ者の数が著しく増大していった。世俗の側は、自らの権力・権威の正当性の根拠をカロリング期と同様に依然として教会に求め続けるか、それともそれぞれが独自に正当化の方法を見つけるか、という二者択一を迫られることになる。多くの君主、世俗権力は後者を選択し、ここに教会が独占してきた象徴体系への挑戦が始まる。13世紀の末ぐらいから、国王をはじめとして諸侯や都市、そして都市のなかの法律家、ギルド、兄弟団、騎士修道会など、それぞれが自らの象徴を公開し、自らの力を確実なものとするべくその正当性を競い合う時代が始まる。

ただしこのプロジェクトのなかで設定されたテーマはあまりにも多様であり、そこから「象徴と国家」のいかなる関係性を描き出そうとしているのか読み取ることはやや困難である。ここではジャン・フィリップ=ジュネが欧州研究会議に提出した申請書から、その方向性をもう少し探ってみたい。彼によれば、前近代の統治組織や制度の形成と発達を考察する際、

これまで一方では政治思想やプロパガンダが、また他方では具体的な統治機構の分析が過度に重視されてきたという。ジュネによれば、特定の意図を持った言葉と象徴がいかなるメディアを介して発信されどのように受容されているのか、その具体的な様相を明らかにすることが重要である。

分析の対象は例えば政治的意思決定の過程に向けられる。ジュネのみるところ、近代国家形成過程における「主権」の問題と「代表制」の問題はこれまで数多く議論されてきたが、代表たちの間で合意が形成される場においてどのような「dialogue=対話」が行われていたのか、その具体相に関する考察は十分に行われてこなかったという。その解明に向けた手がかりとして彼が重視するのは、ひとつには議論の公開性であり、もうひとつは議論で用いられる言葉である。ここでは社会言語学的な観点からこの時代の俗語を考えることの重要性が示されている。

ジュネによれば、開かれた場における意見交換のなかで生み出されるひとつの合意を公論として尊重する姿勢は、世俗の場ではなく教会のなかから、とくにグレゴリウス改革を通じて生み出されるとする。また議論の場で用いられる俗語に関しては、時にその語彙の乏しさゆえに、抽象的な概念や理念の共有を可能とする円滑なコミュニケーションは難しかったのではないかとの指摘がなされている。13世紀末の段階では、いまだラテン語が唯一の共通語であった。しかし13世紀後半ぐらいからは、ヨーロッパの各地で俗語の存在感も高まりつつあった。カスティーリャ王国やフランス王国ではラテン語から俗語への翻訳に翻訳家ともいえる人々が登用されており、またダンテは、14世紀の初めに書き言葉としての俗語の重要性について論じている。生成期の俗語の可能性と限界を見きわめることも重要である。もちろんこの研究プロジェクトが意図するのはこのようなディスクール分析ばかりではない。彫刻、建築、あるいはジェスチャーや衣服など、非言語的表象の持つ重要性にも注意が促されている。

彼らは研究に際してデジタルデータの活用にも重点を置いている。中世史料を言語学的に分析するためのPlateforme d'Analyse Linguistique Médiévale PALM/MEDITEXT[55]、PROSOP、STUDIUMなどのソフトウェアが、プロジェ

クトを通じて開発されている。こうしたソフトウェアを活用することで、複数の政治社会間で取り交わされるコミュニケーションの手段と性格を分析し、ある意図が主張され、受容され、正当化されるその仕組みを明らかにしようとしている[56]。

（2）封建社会論の現在

こうした研究状況のなかで、中世の社会構造を巡る議論の中核をなしてきた封建社会論にも変化が現れてきている。ドミニク=バルテルミの近著や、フロンリン=マゼルなど新しい世代の最近の研究に基づいて現在の封建社会論を整理すれば、その要点は次の三つにまとめられるだろう[57]。

第一に、これは「紀元1000年の変容」論争以降の流れであるが、中世という時代のなかに封建的秩序の変化を指標としていくつかの段階を設定することは、ますます難しくなっている。9世紀から12世紀にかけて、世俗権力による在地支配は長期的に変化しており、他方でその地域的偏差は大きい。そこでは「公的」な伯権力や司教権力が「私的」な在地有力家門によって急激かつ不法に簒奪されることはない。むしろ「公的かつ私的で」、家産的（すなわち世襲的）ではあるが一定の制度の存在が認められ、世俗的であるが教会システムに支えられた在地支配が確認される。そしてフランス地域に関しては、12世紀後半頃からの、フランス・カペー朝による所領拡大と軌を一にして進んでいく、領主層による在地支配の「世俗化」過程に注目が集まっている。

第二に、研究者の多くは社会全体の暴力性に対して懐疑的である。復讐行為としてのフェーデが親族関係にある者を多数巻き込み、法廷外で長期間に渡って展開していたと考える人は少ない。フェーデは法廷における紛争解決を補完するものとして機能していた。暴力は統御されており、統治機構の未熟さに由来するとされた調停や仲裁の広がりもまた、平和維持に一定の役割を果たすものとして積極的に評価されている。そこに現れてくるのは、主としてアメリカの歴史学界から寄せられた批判を受け止めるかたちで展開される、どちらかといえば妥協型・和解選択型紛争解決社会と

しての中世ヨーロッパ像である。

第三に、10世紀前後の「教会の危機」への懐疑が示されるなかで、教会勢力と世俗領主層との在地支配における連携、あるいは輻輳的な関係が重視されている。かつてデュビーは中世フランスの封建社会に関して、教会作成文書に記された10世紀フランス社会のアナーキー的暴力的性格を前提に、それに対応するものとして世俗・教会領主層による自律的支配領域の形成という基本構想を描いていた。しかし教会作成文書における俗人（戦士層）への言及の多さは、彼らに対する脅威ではなく、むしろ関係緊密化の現れとみなされる。在地の教会や修道院に対しては世俗領主家門から人材が供給され、また世俗領主には教会保護権が設定されていた。在地教会との良好な関係が、世俗領主による統治に一種の正当性と「公的」な性格を付与することになったのである。彼らは修道院の創建や再建にとどまらず聖所の設定にも積極的であり、その結果各地で聖人・聖遺物崇敬が流行している。しかしたとえばアンジュー地方では、少数の有力世俗領主層による在地教会統制が進んでいたのに対し、プロヴァンス地方では多数の小規模領主と個々の教会が強固に結びついていたとされ、ここでも地域的偏差の大きさが指摘されている。

（3）中世フランス史の基本的枠組み

このように封建社会論は、政治文化研究の成果を組み込んだ議論を展開している。その成果はベラン（BELIN）社から刊行された<Histoire de France>シリーズの中世部分についても見て取ることができる[58]。全体的な叙述傾向を示せば以下のようになるだろう。フランス史の起点はパリ伯ウードの西フランク国王即位に置かれる。ただし9世紀末から12世紀末までの封建的フランスは、言語的、慣習的に多様な地域のモザイクであった。そうしたなか1050年頃からの、レオ９世に始まるいわゆる「グレゴリウス改革」は、後のフランス地域に与えた文化的精神的影響力の点から高く評価されることになる。その後、カペー朝のフィリップ２世治世（1180-）から、ルイ９世治世（1226-1270）を含んでフィリップ４世治世 (1285-1328)

までは、フランスが国家として生成される「長い13世紀」と位置づけられ、さらにルイ9世治世の終わり、1270年をひとつの画期として二つに分けられる。前半は経済的・文化的発展と軌を一にする王権の領域的制度的拡充の時期として、あるいはランス、パリ、サン=ドニなどの聖所としての発展にみられるような超越的王権観伸張の時期とされる。また後半は、経済的停滞のなかで王権の強化・再編過程と位置づけられ、百年戦争による経済危機や人口危機を経験しながらも、全体としてラテン=キリスト教世界における政治的・文化的影響力を増大させることに成功し、フランスが「国家として誕生する」ことになる。

おわりに

近年の中世フランス史研究においては、ジョルジュ=デュビーのように、コレージュ=ド=フランスなどを拠点にヨーロッパにとどまらず広く世界中の中世史家たちに影響を与え続けるような歴史家は現れていない。しかし彼が一線を退いた1980年代以降、研究者ひとりひとりの、あるいはCNRSなどの支援を受けて全ヨーロッパ的に組織・展開された共同研究の歩みをたどっていくならば、そこに政治文化の解明を目的とする膨大な成果が蓄積されてきていることに気がつくだろう。こうした旺盛な研究活動は、2000年代に入っても衰えてはいない。担い手は「5月革命世代」からさらに若い世代に移っており、その成果は、上で確認したように伝統的な封建社会論、あるいは古代末期から近現代にかけてのフランス史理解に確実に影響を及ぼしている。

ただしこのような政治史研究も、ここ数年は社会言語学的な方向に進みすぎているようにも思われる。かかる研究姿勢とそこから生み出される種々の成果は、ピーター=バークなどが重視する「知の歴史（インテレクチュアル ヒストリー）」との相性は良いかもしれないが、言語表象以外の象徴物を通じて展開される多様なコミュニケーションへの配慮を欠くことがないよう留意する必要もあるだろう。

研究の今後に関しては、以下のような課題も予想される。一つ目は、ナ

ショナルヒストリーとの関係である。ここまで紹介してきた前近代ヨーロッパ社会の政治（文化）史研究は、文化というものが持つ越境性と多様性ゆえにトランスナショナルな分析にも適合的であるが、近年のいわゆる「グローバルヒストリー」との関わりを考える場合には、本稿**1**ー⑴で確認したような19世紀における一国史的かつジャコバン的な歴史学の名残、あるいは時に現れるそうしたものへの回顧ともいえる動きにどう対処するか考えておくことが必要になるだろう。二つ目は、いわゆる「言語論的転回」後の歴史学界の在り方である。ここで示した歴史学(Historiography)の諸成果は、はたして歴史理論（Historical Theories & Methods）や歴史哲学（Philosophy of History）のなかで示されている様々な批判や提案との間に有意義な対話をなしえているのか、という問題もあるだろう。そして最後に、研究の継続性に関する問題がある。社会の「グローバル化」や新自由主義思想の広がり、そして大学の大衆化などを背景として、中世史学を含む人間・社会科学（Sciences humaines et sociales）全般において、ヨーロッパ各国あるいは南米そして東アジアでも、講座の閉鎖や再編、アカデミック=ポストの減少など、研究環境を維持していくうえでの大きな困難が生じつつある。中世フランスの政治文化研究が「権力」に関心を集中させてきたその社会的背景を考えるとき、今後もディシプリンとしての中世史学を維持し、かつ他領域との積極的な連携を進めていくこと、そのような研究活動は果たして可能なのかという、より深刻な課題が生じつつあることも受け止めなければならないだろう[59]。

---

[1] 中世研究全体に目を広げるならば、史料を巡る諸問題、たとえばデジタルテキスト・データベースの作成・公開や、分析に際してのテキストマイニングソフトなど種々のソフトウェアの活用、さらには史料のモノとしての側面や、それが具体的に機能する場に着目する史料論の議論についてもふれるべきであろう。また法制史や経済史の分野でも、この間膨大な研究が蓄積されている。これらを含めた研究動向の整理も必要であるが、現時点ではまだその準備が整っていないことから、本稿では対象を政治史に限定する。

[2] オーギュスタン=ティエリ（小島輝正訳）『メロヴィング王朝史話 上・下』岩波書店（岩

波文庫）、1992年。本書のフランスでの初版刊行は1840年。

[3] フランソワ=ギゾー（安士正夫訳）『ヨーロッパ文明史：ローマ帝国の崩壊よりフランス革命にいたる』みすず書房、1987年（みすず書房、2006年：新装版）。フランソワ=ギゾー『歐洲代議政體起原史：第一册・第二册 代議政體原論：完』（『欧州〜』は漆間真学訳、『代議政〜』は山口松五郎譯）自由出版社、1882-1883年（信山社出版、2013年：復刻版）

[4] フュステル=ド=クーランジュ『古代都市』（田邊貞之助訳）白水社、1944-48年、1947-48年、1950年、1956年、1961年、1995年。同『古代家族』（中川善之助訳）弘文堂、1927年。同『希臘羅馬史論』（鈴木鋹之助訳）國民圖書、1923年。同『古代フランス土地制度論』（明比達朗訳）日本評論社、1949年。同『フランス封建制度起源論』（明比達朗訳）御茶の水書房、1956年。

[5] アシル=リュシェール（木村尚三郎・福本直之訳）『フランス中世の社会　フィリップ＝オーギュストの時代』東京書籍、1990年

[6] ジュール=ミシュレ（大野一道・立川孝一監修）『フランス史』（全6巻）藤原書店、2010-2011年

[7] 主な著作は*La société aux XIe et XIIe siècles dans la région mâconnaise, Paris, 1953; Le dimanche de Bouvines (27 juillet 1214), Gallimard《Trente journées qui ont fait la France》*, Paris, 1973［『ブーヴィーヌの戦い—中世フランスの事件と伝説』（松村剛訳）平凡社、1992年］; *L'Histoire continue, Paris*, 1991［『歴史は続く』（松村剛訳）白水社、1993］. またジャック=ル=ゴフほか（二宮宏之編訳）『歴史・文化・表象—アナール派と歴史人類学』岩波書店、1992年など。

[8] Pierre Toubert, *Les structures du Latium médiéval. Le Latium méridional et la Sabine du IXe siècle à la fin du XIIe siècle*, Rome et Paris, 2 vols., 1973.

[9] Philippe Contamine, *La Guerre au Moyen Âge*, Paris, 1980.［フィリップ=コンタミーヌ（坂巻昭二訳）『百年戦争』白水社（文庫クセジュ）、2003年］

[10] Bernard Guenée, *Un meurtre, une société. L'assassinat du duc d'Orléans, 23 novembre 1407*, Paris, 1992.［ベルナール=グネ（佐藤彰一・畑奈保美訳）『オルレアン大公暗殺：中世フランスの政治文化』岩波書店、2010年］

[11] Michel Foucault, *L'Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris, 1964［ミシェル=フーコー（田村俶訳）『狂気の歴史：古典主義時代における』新潮社、1975年］; *Les mots et les choses*, Paris, 1966［ミシェル=フーコー（渡辺一民/佐々木明訳）『言葉と物：人文科学の考古学』新潮社、1974年］; *L'Archéologie du savoir*, Paris, 1969,［ミシェル=フーコー（中村雄二郎訳）『知の考古学』河出書房新社、1969年］

[12] Bernard Guenée, *Histoire et culture historique dans l'Occident médiéval*, Paris, 1980; Pierre Nora (dir.), *Les lieux de mémoire*, 7 vols, Paris, 1984, 1986, 1992.［『記憶の場：フランス国民意識の文化=社会史』１（対立）・２（統合）・３（模索）［全３巻］、岩波書店、2002-2003年］

[13] 西川長夫『パリ五月革命 私論—転換点としての68年』平凡社、2011年。

[14] Pierre Bourdieu, *La Distinction. Critique sociale du jugement*, Paris, 1979.
［ピエール=ブルデュー（石井洋二郎訳）『ディスタンクシオン<1> <2> 社会的判断力

批判』（藤原書店、1990年）]．あるいは共編著のPierre Bourdieu, et al., *Le métier de sociologue: Préalables épistémologiques*, Paris, 1968［ピエール=ブルデュー他（田原音和/水島和則訳）『社会学者のメチエ（認識論上の前提条件）』藤原書店、1994年］: Pierre Bourdieu et Jean-Claude Passeron, *La reproduction: Éléments d'une théorie du système d'enseignement*, Paris, 1970.［ピエール=ブルデュー、J.-C. パスロン（宮島喬訳）『再生産　教育・社会・文化』藤原書店、1991年］

[15] Hayden White, *Metahistory: the historical imagination in nineteenth-century Europe*, Johns Hopkins University Press, 1973.［ヘイドン=ホワイト（岩崎稔監修）『メタヒストリー一九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』作品社、2017年］ホワイトの議論を踏まえて生まれたRichard J. Evans, *In defence of history, London*, 1997［『歴史学の擁護：ポストモダニズムとの対話』（今関恒夫ら訳）晃洋書房、1999年］やFrank Ankersmit, *Historical representation*, Stanford University Press, 2001 においてみられるような、近代科学の課題のなかに位置づけられた因果連関や要素の解析ではなく、言説や、作られ、表象されたものを問う視点は、後のフランス史学界の動向と共通する。

[16] Dominique Barthélemy, *La société dans le comté de Vendôme, de l'an mil au XIVe siècle*, Paris, 1993; Dominique Barthélemy, *La mutation de l'an mil a-t-elle eu lieu ? Servage et chevalerie dans la France des Xe et XIe siècles*, Paris, 1997.

[17] Claude Gauvard,《*De grace especial*》. *Crime, État et société en France à la fin du Moyen Âge*, 2 vols., Paris, 1991 (rééd. 2010); Julie Claustre et al. (dir.), *Un Moyen Âge pour aujourd'hui: Mélanges offerts à Claude Gauvard*, Paris, 2010.

[18] Jean Philippe Genet, La genèse de l'État moderne: les enjeux d'un programme de recherche, *Actes de la recherche en science sociales*, 118, 1997, pp. 3-18; Jean Philippe Genet, *La genèse de l'État moderne. Culture et société politique en Angleterre*, Paris, 2003.

[19] さらには「全体的社会的事実」として政治・経済・宗教の複合的な関係に注意を促すマルセル=モースの「社会学」、あるいは諸要素の働きに着目して文化の特徴を明らかにしようとするマリノフスキの「機能主義人類学」、いわゆる個別事例の調査・叙述を重視するマンチェスター学派を率いたマックス=グルックマンなどの成果も影響を与えていると思われる。

[20] Françoise Autrand, *Charles VI, La folie au pouvoir*, Paris, 1986: Françoise Autrand, *Charles V, le Sage*, Paris, 1994.

[21] Colette Beaune, *Naissance de la nation France*, Paris, 1985.

[22] Jean Dunbabin, *France in the Making, 843-1180*, New York, 1985 (2nd ed. 2000).

[23] 近藤和彦「総論　政治文化　何がどう問題か」歴史学研究会編『国家像・社会像の変貌　現代歴史学の成果と課題 II　1980-2000』青木書店、2003年、240-256頁。

[24] 木村茂光監修、歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』東京堂出版、2012年。当該部分の執筆者は高松百香。

[25] Franck Collard, *Pouvoirs et culture politique dans la France médiévale Ve-XVe siècle*, Paris, 1999.

[26] François Bédarida (dir.), *L' Histoire et le métier d'historien en France, 1945-1995*, Paris, 1995.

[27] なおバラールはこの論集とは別に自らMichel Balard (dir.), L'Histoire médievale en France.

Bilan et perspective, Paris, Le Seuil, 1991という論集を編み、中世史研究の動向をより丁寧に整理している。

[28] Claude Gauvard et Régine Le Jan, Le Moyen Age, Jean-François Sirinelli, Pascal Cauchy et Claude Gauvard (dir.), *Les historiens français à l'oeuvre, 1995-2010*, Paris, PUF, 2010, pp. 31-59（以下Le Moyen Ageと略記）: Christian Delacroix, François Dosse, Patrick Garcia et Nicolas Offenstadt (dir.), *Historiographies. Concepts et Débats*, Paris, Gallimard, 2 vols., 2010. また農村世界、キリスト教世界、人的結合社会などをテーマとする研究の動向については、Alain Guerreau, *L'Avenir d'un passé incertain; quelle histoire du Moyen Âge au XXIe siècle ?*, Paris, Le Seuil, 2001; Jean-Claude Schmit et Otto Gerhard Oexle (dir.), *Les Tendances actuelles de l'histoire du Moyen Âge en France et en Allemagne*, Paris, Publications de la Sorbonne, 2002; Sociéte des historiens médiévistes de l'Enseignement supérieur public, *Être historien du Moyen Âge au XXIe siècle, Actes du XXVIIe congrès de la Société des historiens médiévistes de l'Enseignement supérieur public (2007)*, Paris, Publications de la Sorbonne, 2008.

[29] http://www.shmesp.fr/

[30] 第37回集会（2006年）から第46回集会（2015年）までの内容は論集として刊行されている。*Construction de l'espace au Moyen Âge: pratique er représantations*, Paris, 2007; *Être historien du Moyen Âge au XXIe siècle*, Paris, 2008; *L'autorité de l'écrit au Moyen Âge (Orient-Occident)*, Paris, 2009; *Des société en mouvement. Migrations et mobilité au Moyen Âge, Paris, 2010*; *Les relations diplomatiques au Moyen Âge. Formes et enjeux*, Paris, 2011; *Experts et expertise au Moyen Âge. Consilium quaeritur a perito*, Paris, 2012; *Mesure et histoire médiévale*, Paris, 2013; *Nation et Nations au Moyen Âge*, Paris, 2014; *Apprendre, produire, se conduire: le modèle au Moyen Âge*, Paris, 2015; *Gouverner les hommes, gouverner les âmes*, Paris, 2016.

[31] Jean-Philippe Genet, Être médiéviste au XXIème siècle, *Être historien du Moyen Âge au XXIe siècle*, pp. 9-33

[32] Le Moyen Age, p.34.

[33] Elina Magnani (dir.), *Don et pratiques sociales. Théories et pratiques croisée*, Dijon, Éditions universitaire de Dijon, 2007.

[34] Hélène Millet et Pierre Desportes, *Fasti ecclesiae galicanae, Répertoire prosopographique des évêques, dignitaires et chanoines des diocèses de France de 1200 à 1500, I Diocèse d'Amiens-XIII Diocèse de Bordeaux*, Turnhout, Brepols, 1996-2012.

[35] Françoise Autrand, Claude Gauvard et Jean-Marie Moeglin (dir.), *Saint-Denis et la Royauté. Études offerts à Bernard Guenée*, Paris, Publication de la Sorbonne, 1999.

[36] Martin Aurell et al. (dir.), *Signes et couleurs de l'identité politique*, Rennes, PUR, 2008.

[37] Olivier Boulnois, *Au-delà de l'image. Une archéologie du visuel au Moyen Âge, Ve-XVIe siècle*, Paris, Le Seuil, 2008; Alan Ellenius (dir.), *Iconographie*, *propagande et légitimation*, Paris, PUF, 2001; Jean-Claude Schmitt, *Le Corps des images. Essais sur la culture visuelle du Moyen Âge*, Paris, Gallimard, 2002.

[38] Jean Wirth, *L'image gothique*, Paris, Éditions du Cerf, 2008; Colette Beaune et Henri Bresc

(dir.), *Les Royauté imaginaires aux XIIe-XVIe siècles*, Turnhout, Brepols, 2005.

[39] Priscille Aladjidi, *Le Roi, père des pauvres*, Rennes, PUR, 2008.

[40] Alan Boureau, *La Region de l'État. La construction de la République étatique dans le discours théologique de l'Occident médieval, 1250-1350*, Paris, Les Belles-Lettres, 2006; Alan Boureau, *L'Empire du livre. Pour une histoire du savoir scolastique, 1280-1380. De vagues individus. La condition humaine dans la pensée scolastique*, Paris, Les Belles-Lettres, 2008.

[41] Elsa Marmursztejn, *L'Autorité des maîtres. Scolastique, normes et société au XIIIe siècle*, Paris, Les Belles-Lettres, 2007.

[42] Lydwine Scordia et Frédérique Lachaud, *Le Prince au miroir de la littérature politique de l'Antiquité aux Lumières*, Rouen-Le Havre, Presses des universités de Rouen et du Havre, 2007.

[43] Claude Gauvard, *Violence et ordre public au Moyen Âge*, Paris, Picard, 2005; Claude Gauvard, Robert Jacob et Andrea Zorzi (dir.), *La Vengeance en Europe, 1200-1800*, Paris, Publication de la Sorbonne, 2014.

[44] Dominique Barthélemy, *Chevaliers et miracles. La violence et le sacré dans la société féodale*, Paris, Armand Colin, 2004; Dominique Barthélemy, François Bougard et Régine Le Jan (dir.), *La Vengeance, 400-1200*, Rome, École français de Rome, 2006.

[45] Olivier Mattéoni (dir.), *De part et d'autre des Alpes. Les châtelains des princes à la fin du Moyen Âge*, Paris, Publication de la Sorbonne, 2006; Jean-Philippe Genet, François Foronda et José Manuel Nieto Sora (dir.), *Coups d'État au Moyen Âge ? Aux fondements des pouvoirs politiques en Europe au Moyen Âge*, Madrid, Casa de Velázquez, 2005.

[46] François Foronda (dir.), *Avant le contrat social. Le contrat politique dans l'Occident médiéval, XIIIe-XVe siècle*, Paris, Publications de la Sorbonne, 2011.

[47] Albert Rigaudière, *Penser et construire l'État dans la France au Moyen Âge, XIIIe-XVe siècle*, Paris, 2003; Hélène Millet (dir.), *Suppliques et requêtes. Le gouvernement par la grâce en Occident, XIV-XVe siècle*, Rome, 2003.

[48] Claude Gauvard (dir.), *L'Enquête au Moyen Âge*, Rome, École française de Rome, 2008.

[49] Patrick Boucheron (dir.), *Histoire du monde au XVe siècle*, Paris, Fayard, 2009.

[50] Michel Balard, *Les Latins en Orient (XIe-XVe siècle)*, Paris, PUF, 2006.

[51] Damien Coulon, Christophe Picard et Dominique Valérian, *Espaces et réseaux en Méditerranée* (*VIe-XVe siècle*) *Vol. I La configuration des réseaux*, Saint-Denis, Bouchène, 2007; *Vol. II La formation des réseaux*, Saint-Denis, Bouchène, 2010.

[52] 現在まで19点刊行されており、出版元はすべてBrepols。最近のものとしては、説教・誓約・呪術の場面で用いられる言葉とその効果を論じたNicole Bériou, Jean-Patrice Boudet et Irène Rosier-Catach (eds.), *Le pouvoir des mots au Moyen Âge*, 2014；中世後期のフランスとイタリアを主たる対象に、ワインの効用あるいは危険性をめぐる当時の議論を分析するAzélina Jaboulet-Vercherre, *The Physician, the Drinker, and the Drunk：Wine's Uses and Abuses in Late Medieval Natural Philosophy*, 2014；12世紀ヨーロッパの教会や修道院で用いられていた祈祷文「主の祈り」の多様性を明らかにしたFrancesco Siri(éd.), *Le Pater noster au XIIe siècle：Lectures et usages*, 2015；中世における書翰作文術

の発展を辿るBenoît Grévin (éd.), *Le dictamen dans tous ses états. Perspectives de recherche sur la théorie et la pratique de l'ars dictaminis (XIe-XVe siècles)*, 2015；12世紀のランやシャルトルあるいはパリのサン=ヴィクトル修道院で形成された学究グループ、いわゆる「学派」と、同じ時期に生み出されるロマンス語文学作品との関係を論じたValérie Fasseur et Jean-René Valette (eds.), *Les Écoles de pensée du XIIe siècle et la littérature romane (oc et oïl) Études recueillies,* 2016がある。今後出版が予定されているものとしては、Les cisterciens et la transmission des textes (XIIe-XVIIIe siècles), 2018やPhilippe le Chancelier prédicateur, théologien et poète parisien (du début du XIIIe siècle), 2017など。

[53] モーリス=ゴドリエ（竹沢尚一郎・桑原知子訳）『人類学の再構築 -人間社会とはなにか-』明石書店、2011年。

[54] 研究プロジェクト最終年度の集会は「特権文書から憲法へ　ヨーロッパにおける立憲思想について（12世紀－17世紀）<Des chartes aux constitutions: Autour de l'idée constitutionnelle en Europe (XIIe-XVIIe siècles)>」をテーマに、2014年1月にマドリッドで開催された。報告書はhttp://cordis.europa.eu/result/rcn/180125_en.htmlに掲載されている（2017年10月25日閲覧）。

[55] http://palm.huma-num.fr/PALM/13世紀から16世紀初めにかけてのラテン語および俗語史料に含まれる用語を歴史学者が統計学的に分析するために開発されたソフトウェアで、この時期の俗語に顕著な綴字の不統一や多様性を前提としている。

[56] Patrick Boucheron et Jean-Philippe Genet (dir.), *Marquer la ville: signes, traces, empreintes du pouvoir, XIIIe-XVIe siècle: actes de la conference organisée à Rome en 2009*, Paris, Publication de la Sorbonne, 2014.

[57] Dominique Barthélemy, *Nouvelle histoire des Capétiens 987-1214*, Paris, Édition du Seuil, 2012: Florian Mazel, Pouvoir aristocratique et Église aux Xe-XIe siècles. Retour sur la《révolution féodale》dans l'œuvre de George Duby, *Médiévales*, 54, 2008, pp. 135-150: Florian Mazel, *Féodalités, 888-1180*, Paris, 2010 (rééd. 2014).

[58] Geneviève Bührer-Thierry, Charles Mériaux, *La France avant la France (481-888)*, Paris, Belin, 2010; Florian Mazel, *Féodalités (888-1180)*, Paris, Belin, 2010; Jean-Christophe Cassard, *L'âge d'or capétien (1180-1328)*, Paris, Belin, 2011; Boris Bove, *Le temps de la guerre de Cent Ans (1328-1453)*, Paris, Belin, 2010.

[59] 行論のなかでは紹介できなかったが、本論に関わる参考文献として以下も重要である。歴史学研究会編『歴史学のアクチュアリティ』東京大学出版会、2013年。戦後派研究会編『21世紀歴史学の創造』（全９巻）有志社、2012-2013年。小田中直樹「比較史の復活へ：西洋中心主義的一国史学とグローバル史学の双方を超えて」『TERG（TOHOKU ECONOMICS RESEARCH GROUP）ディスカッションペーパー』309、2013年（11月25日）、1-13頁。長谷川貴彦「文化史研究の射程　―「転回」以降の歴史学のなかで―」『思想』1074、2013年（10月）、6-20頁。岡崎敦「西欧中世研究の「文化史的」読解―テクスト、言説、主体―」『思想』1074、2013年（10月）、54-70頁。鹿島徹『可能性としての歴史―越境する物語り理論』岩波書店、2006年。渡辺和行「歴史学の危機と『アナール』：21世紀の社会史に向けて」『奈良女子大学文学部研究教育年報』第3号、2007年、49-62頁。